

第4節 備中西部・備後系土器と対外交渉

1. はじめに

既刊の「旧練兵場遺跡Ⅱ」で紹介したとおり、多くの搬入・模倣土器が出土している。搬入・模倣土器が弥生後期前半期に集中する傾向は、本書で報告する 22.23.25 次調査においても大きな変更点はみられないが、その中でも備中西部や備後地域からの搬入・模倣品が目立つ。

本書では、多くの搬入・模倣土器の中から、備中西部・備後系土器を取り上げ、検討対象を丸亀平野全体に広げ、旧練兵場遺跡の対外交渉の機能と、その流入の背景を考える。

2. 丸亀平野における備中西部・備後系土器の出土傾向

備中西部とした資料は、小田川流域に分布するかつて「白江式」とされた土器群（間壁 1966）であり、雲母・角閃石を多く含む胎土にベンガラで彩色を行う特徴から、ほぼ全てが搬入品とみられる。他の地域から搬入・模倣土器が、後期前半期を中心とするのに対して、備中西部の一部の資料は、鬼川市Ⅲ式段階まで下る可能性がある資料が一定量含まれるなど、時間幅をもって搬入されている特徴がある。検討を行うにあたって、備中西部の土器様相は、備後南部に共通する特徴をもつ土器群¹が存在することなどから、ここでは、小地域を限定した形で提示せず「備中西部・備後系土器」として一括して検討を進めたい。

西白方・瓦谷遺跡出土資料（図 967）

西白方・瓦谷遺跡は、弘田川河口部の丘陵斜面に立地する集落であり、壺・甕・鉢を中心とした資料が出土している（香川県教委 2011）。壺胴部片（214）は、胎土中に雲母・角閃石を多く含み、外面全体をベンガラで赤塗するもので、備中西部からの搬入土器とみられる。長頸壺（359）は、搬入品としての識別が困難であるが、口縁部の拡張などの形態からみて、鬼川市Ⅲ式に比定される資料である。鉢（425.427～429.492）は、備後地域の V-2～V-3 様式に比定される資料である。複合口縁をもつ甕（339.397.403.478）は、類似した資料が旧練兵場遺跡を中心とした丸亀平野西部地域に散見されるが、内傾する口縁部形態などから、備後地域の V-3 様式にみられる資料と判断した。複合口縁の壺、あるいは甕（534.535）は、山陰系統の資料とみられるが、備後北部地域の可能性も否定できない。

稲木遺跡出土資料（図 968）

稲木遺跡（C 地区）は、弘田川と金倉川に挟まれた標高約 22m の扇状地上に立地する集落である。海浜部から距離は約 5.5km 内陸、旧練兵場遺跡からは 2.5km の位置にある（香川県教委他 1989）。

長頸壺（99-3）、甕（99-5）、器台（739-209）は、ベンガラによる外面赤彩や雲母・角閃石を多く含む胎土からみて、備中西部からの搬入品であり、鬼川市Ⅲ式に比定される。複合口縁壺（151-11.246-37.258-1）は、口縁部形態や頸部外面の列点文などから、備後 V-2 に散見される資料に類似している。台付鉢または脚台付壺（125-155）は、胎土中に雲母・角閃石が多く含まれていないが、形態からみて、備中西部からの搬入・模倣土器と考えられる。大型鉢（238-180）と鉢（258-15）は、雲母が目立つ丸亀平野西部産の土器（本章第3節で詳説）に類似した胎土をもっているが、形態的にみて、備後・備中西部からの影響を想定するべきであろう。複合口縁をもつ小型甕（239-193）は、山陰系統とみられるが、備後

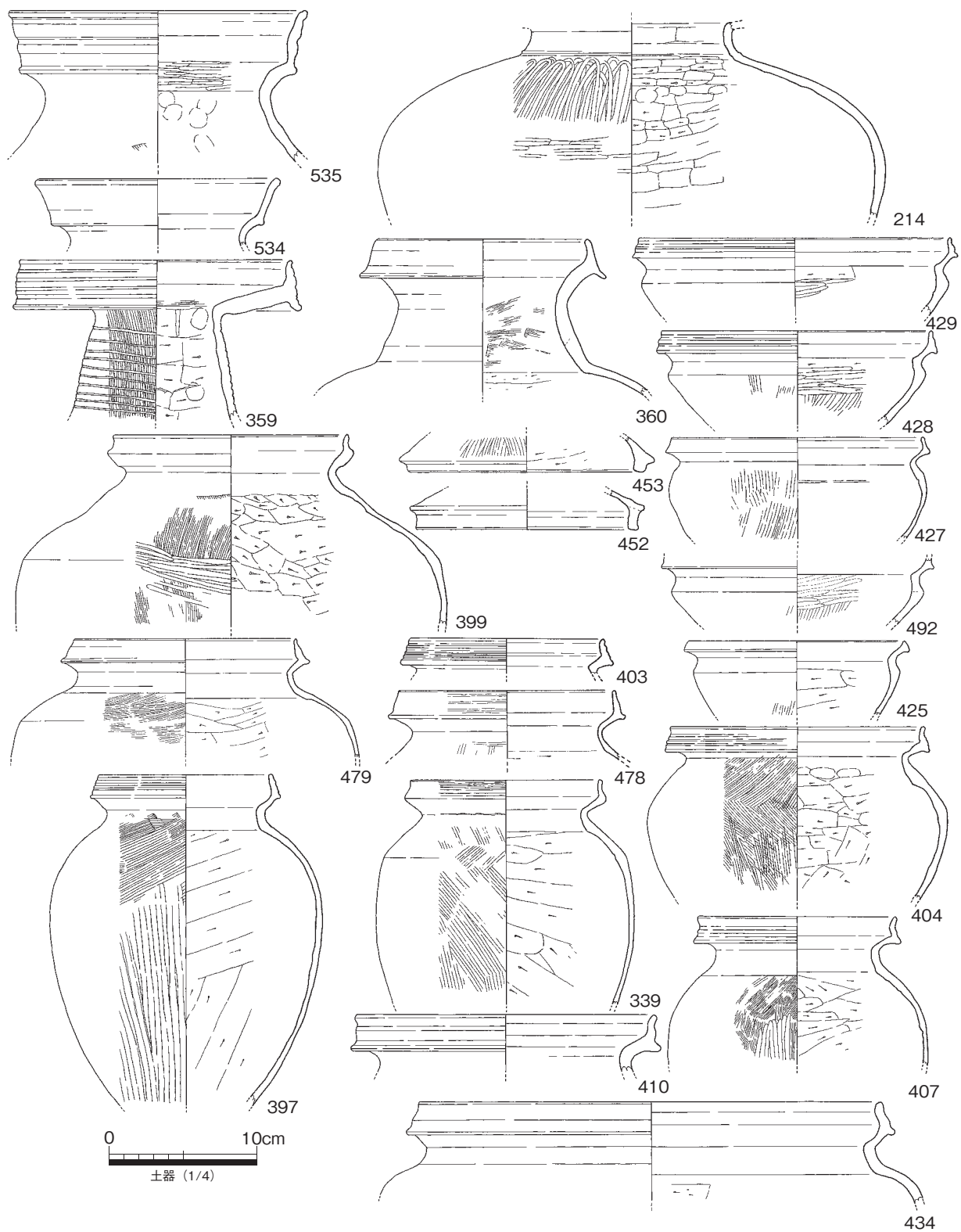


図 967 西白方瓦谷遺跡の備中西部・備後系土器

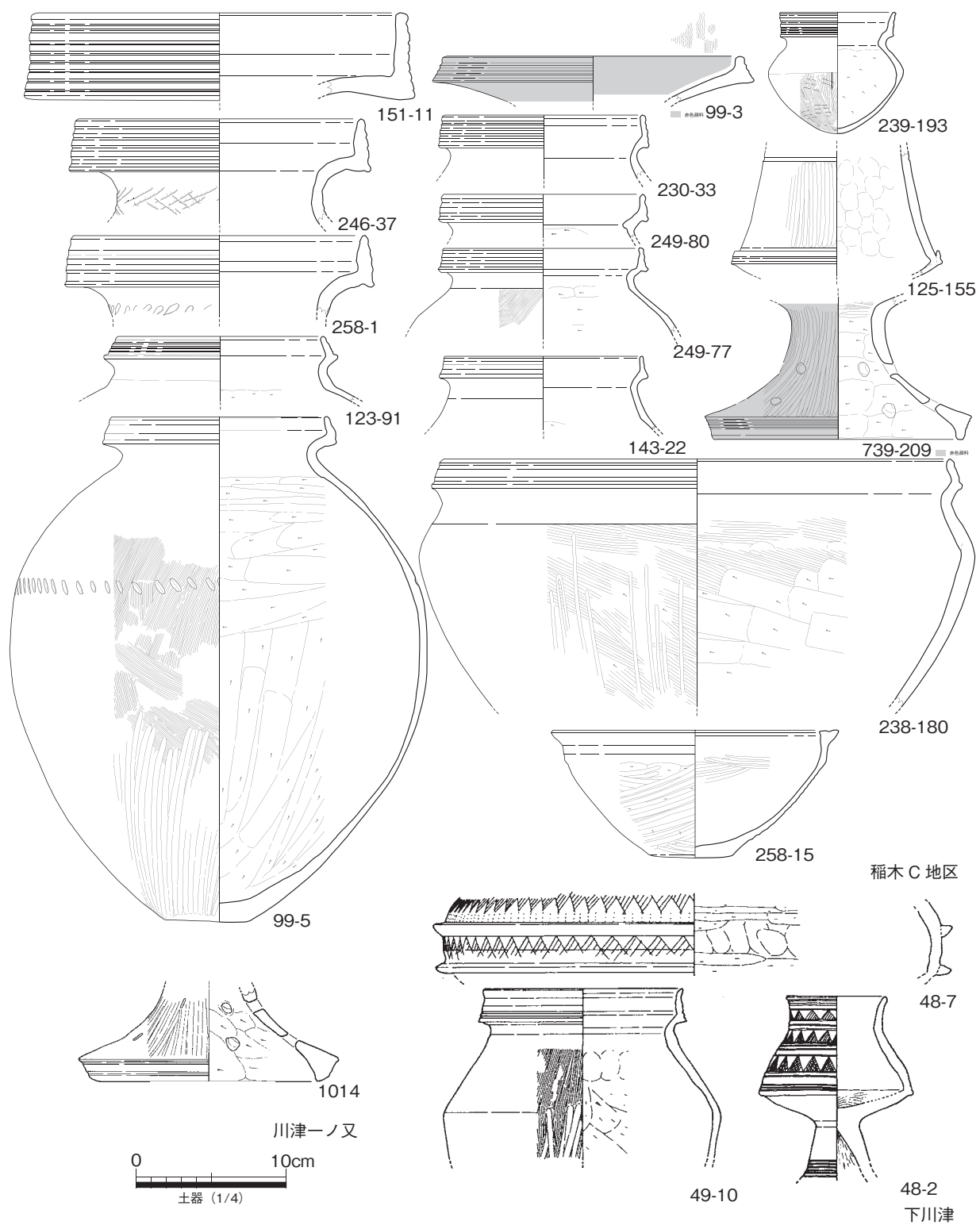


図 968 稲木遺跡・川津一ノ又遺跡・下川津遺跡の備中西部・備後系土器

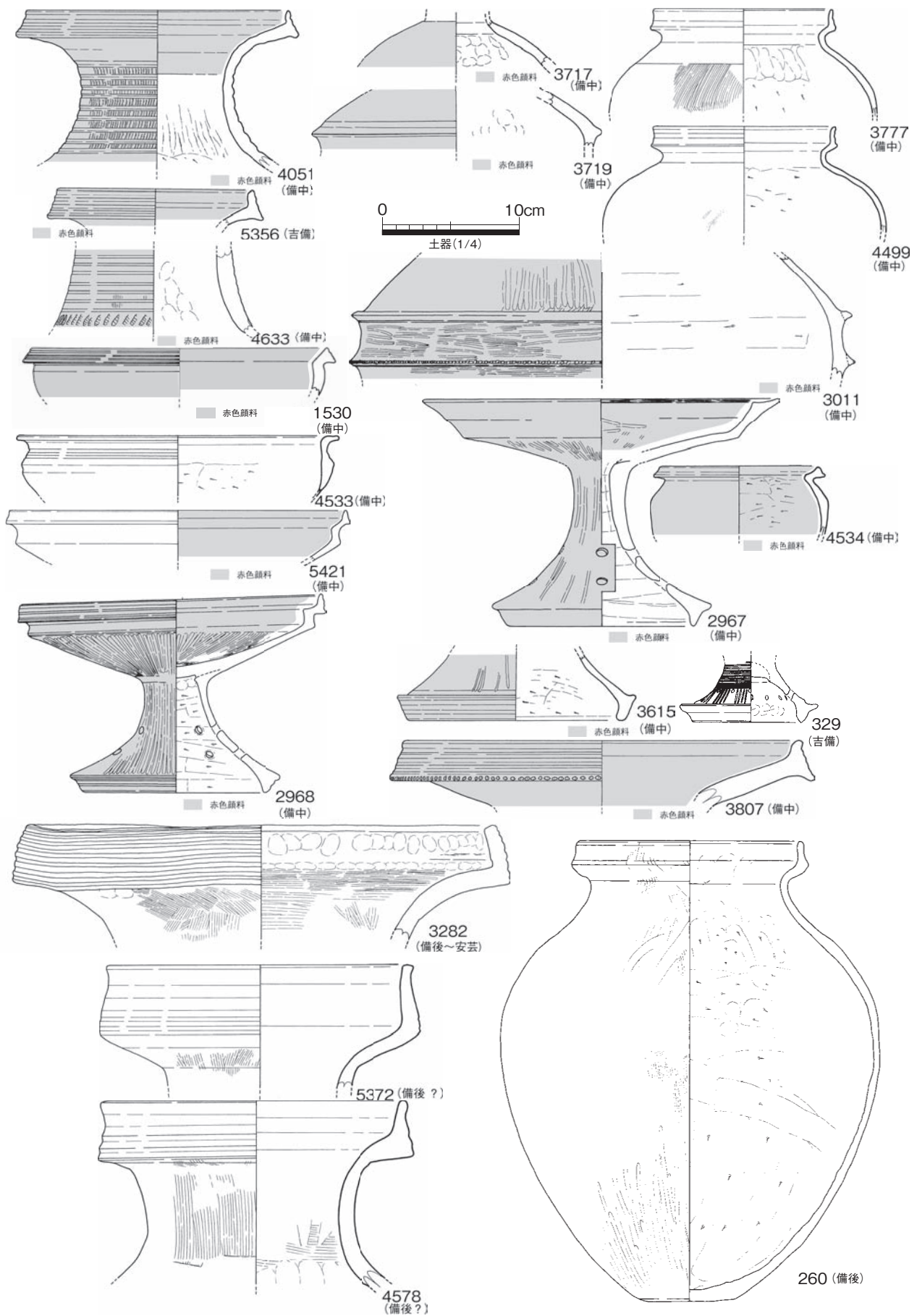


図 969 旧練兵場遺跡の備中西部・備後系土器 (1)

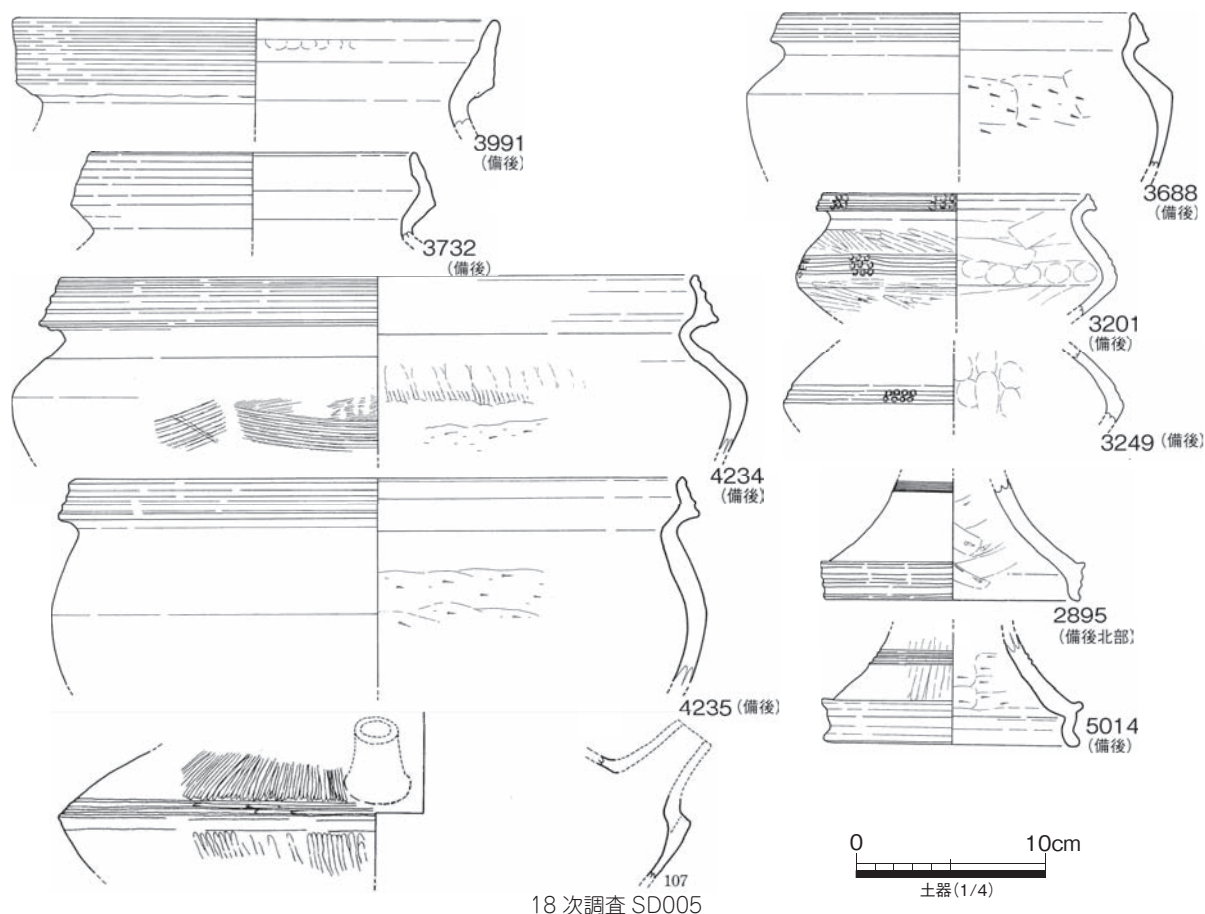


図 970 旧練兵場遺跡の備中西部・備後系土器 (2)

北部の可能性も考えられる。

下川津遺跡出土資料 (図 968)

下川津遺跡は、丸亀平野北東部の大東川河口に形成された弥生後期後半から古墳前期前半期の集落である (香川県教委ほか 1990)。居住域縁辺部の旧河道である第 1 低地帯流路 1 において数点の出土が確認されるが、丸亀平野西部の弘田川流域と比較して小数に止まる。胎土の確認が行えていないが、突帯及び鋸歯文で加飾する壺 (48-7)、脚台付壺 (48-2) は備中西部、口縁部の上方への拡張が著しい甕 (49-10) は、備後からの影響を想定できる。

川津一ノ又遺跡出土資料 (図 968)

川津一ノ又遺跡、下川津遺跡から約 1.5km 内陸側の自然堤防上に立地する弥生後期後半から古墳前期初頭の集落である (香川県教委ほか 1997)。器台または高杯脚 (1014) が出土しており、雲母・角閃石を多く含む胎土や下方に拡張する肉厚な脚端部の形態から、備中西部からの搬入品と考えられる。

旧練兵場遺跡出土資料 (図 969・970)

詳細は、「旧練兵場遺跡Ⅱ」で報告しているので省略するが、丸亀平野内では最も資料数が多い。赤彩された備中西部から搬入品が目立つが、備後南部の複合口縁壺 (3282.5372.4578) や、備後北部の資料に類似する脚端部を下方へ明瞭に拡張する高杯 (2895.5014) が含まれている。



図 971 丸亀平野における箱形石棺と備中西部・備後系土器の分布

丸亀平野内の備中西部・備後系土器は、時間的にみて後期前半期から後半期にかけての鬼川市Ⅰ式からⅢ式にかけての資料であり、その分布は北東部の大東川下流域の下川津遺跡や川津一ノ又遺跡では数点の出土に止まり、西白方瓦谷遺跡と稲木遺跡、旧練兵場遺跡など弘田川水系を中心とした丸亀平野西部に偏在する傾向があり、特に旧練兵場遺跡への集中が顕著である。

この弘田川水系を中心とした丸亀平野西部地域に偏在した分布状況からは、旧練兵場遺跡を中心として交易・交流が行われ、弘田川河口部の西白方・瓦谷遺跡はその外港的機能をもっていたことを示唆していると考えられる。

また、讃岐地域内に広げてみた場合、この備中西部・備後系土器の集中は特異である。例えば、讃岐

地域内の主要な平野である多くの弥生集落が立地する高松平野においてはこれほどまでの備中・備後系土器の出土は知られていない。しかし、その一方で、対岸の備前側において、高松平野の香東川下流域産の土器群が多く出土する状況がみられる。土器の搬入方向の違いはあるけれども、備讃地域においては、平野単位で交易・交流の主たる対象となる地域が異なっている状況も想定しておくべきであろう。

3. 箱形石棺と刺突漁具の伝播と備中西部・備後系土器（図 971）

こうした弥生後期の丸亀平野西部の備中西部・備後系土器が集中の背景について、他の考古資料を使って更に分析を進めたい。備中・備後系土器と同様に丸亀平野西部に偏在的な分布を示す考古資料には、旧練兵場遺跡南部の丘陵部において集中的に確認されている箱形石棺がある。

旧練兵場遺跡内では、住居群に近接して営まれる少数の土器棺墓（小児用）や、3次調査（仙遊遺跡）の箱形石棺墓などを除き、住居群に隣接した位置に墓域が形成されることはない。成人を中心とした墓域は、遺跡南部の香色山や大麻山山塊の箱形石棺墓群に求められ、原則として居住域と墓域の分離が図られる。居住域と墓域を明確に分離し、集落が望める山塊に造墓するパターンは、弥生後期初頭以降の県内の高松平野及び以東の地域や、対岸の吉備南部地域とも共通している（宇垣 1999、大久保 1999）が、旧練兵場遺跡周辺の箱形石棺を専ら採用する点は、讃岐地域の中でも特徴的となっている。

備讃瀬戸及びその周辺地域において、弥生時代に箱形石棺を多く採用する地域としては、中期末葉から後期前葉の安芸から備後北部地域があげられる（向田 1996、稲垣 1996 ほか）。また、多くの墓制資料の蓄積がみられる吉備南部地域でも、小地域によって箱形石棺の採用は異なるようだ。備前では、弥生後期前半から古墳初頭にかけて連続的に造墓されるみそのお遺跡（椿他 1993）などを典型例として、箱形石棺の採用は一般的ではない。備中では、殿山古墳群（平井勝 1982）で確認できるなど、同地域の中でも西部に展開する傾向がある。備前・備中では備後・安芸に隣接する地域で主に採用されているとみることができる。

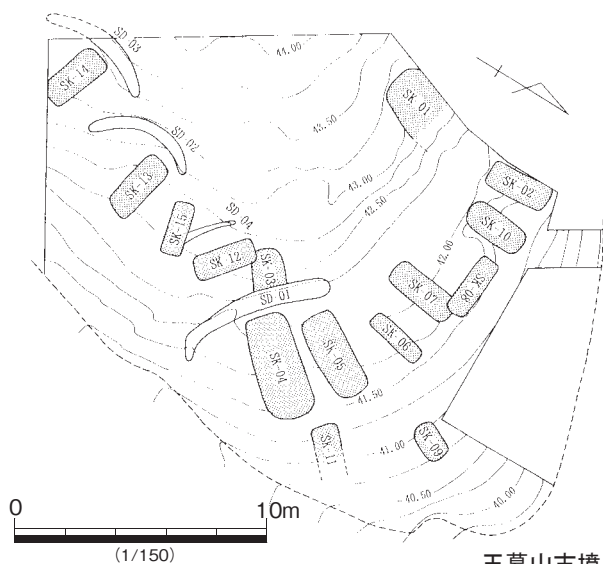
この箱形石棺の分布圏は、丸亀平野西部地域における備中西部・備後系土器の搬入元となる地域とはほぼ重なる。旧練兵場遺跡南部の山塊を中心に展開する箱形石棺の導入は、備中西部・備後系土器の流入とともに展開された交易・交流に伴って行われたと考えられる。また、墓制変化を伴う点からは、単に土器やその内容物の交易だけではなく、同地域から一定程度の集団の移動・移住が行われたことを窺わせるものである。

また、旧練兵場遺跡における交易・交流を示す出土遺物に、瀬戸内海沿岸では希少な事例となる鉄製刺突漁具がある。弥生時代における鉄製刺突漁具は、日本海沿岸を中心に分布することが指摘されている（池淵 2003）が、旧練兵場遺跡 26 次調査において出土した鉄製刺突漁具は弥生終末期に帰属し、かえりの形態から山陰の沖丈遺跡出土例や南講武草田遺跡例との類似が指摘されている（乗松 2011）。

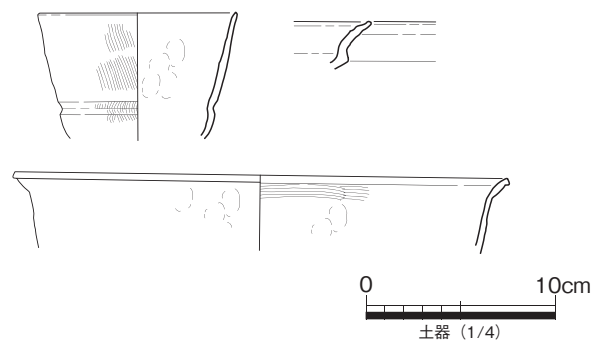
沖丈遺跡は、備後北部の三次盆地から日本海側へ流下する江の川中流域に所在しており、前述した丸亀平野西部における備後北部系土器の存在を合わせて考えると、丸亀平野から対岸の備後を挟んで日本海沿岸へ伸びる南北方向の交易・交流ルートが存在を想定できる。

4. まとめ

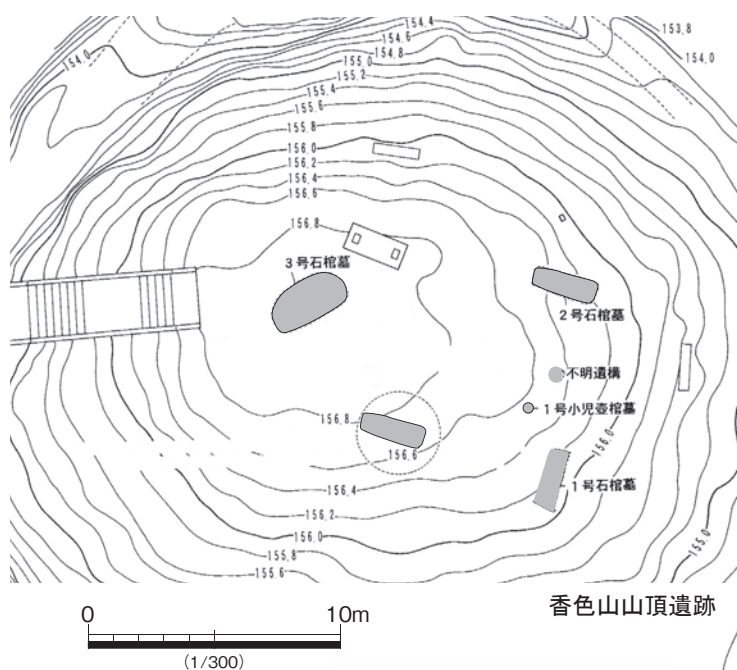
旧練兵場遺跡を中心とした丸亀平野西部における備中西部・備後系土器の流入は、箱形石棺の導入にみられる墓制の変化を伴っていることから、一定程度の集団の移動・移住を伴うものであった可能性が



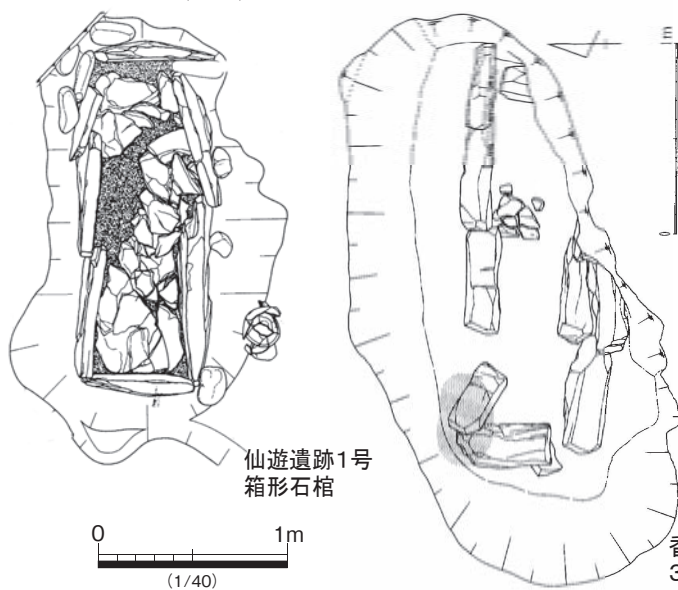
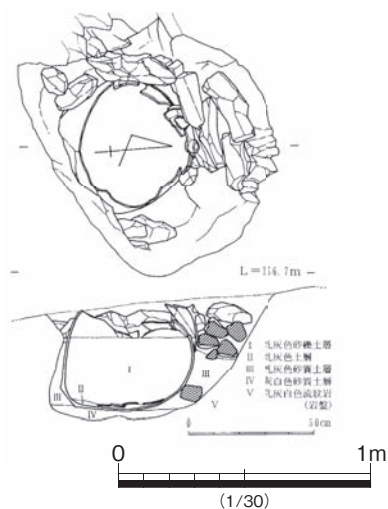
王墓山古墳周辺箱形石棺墓群



王墓山古墳周辺箱形石棺墓群出土土器

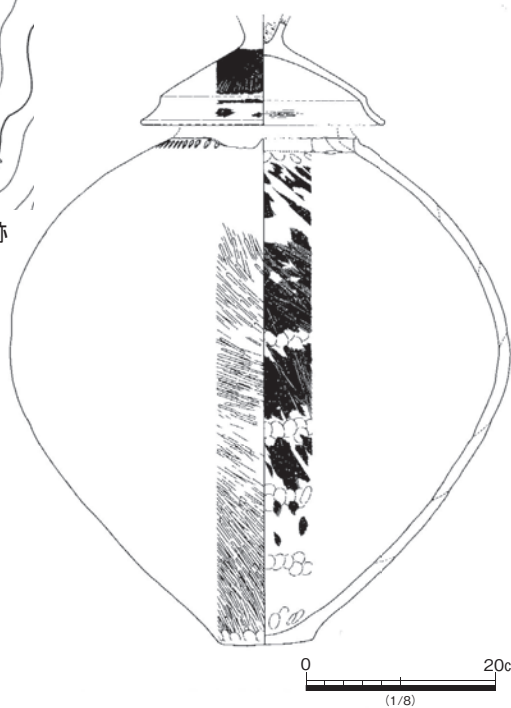


香色山山頂遺跡



仙遊遺跡1号箱形石棺

香色山山頂遺跡3号箱形石棺



香色山山頂遺跡1号土器棺

図 972 墓域の構成

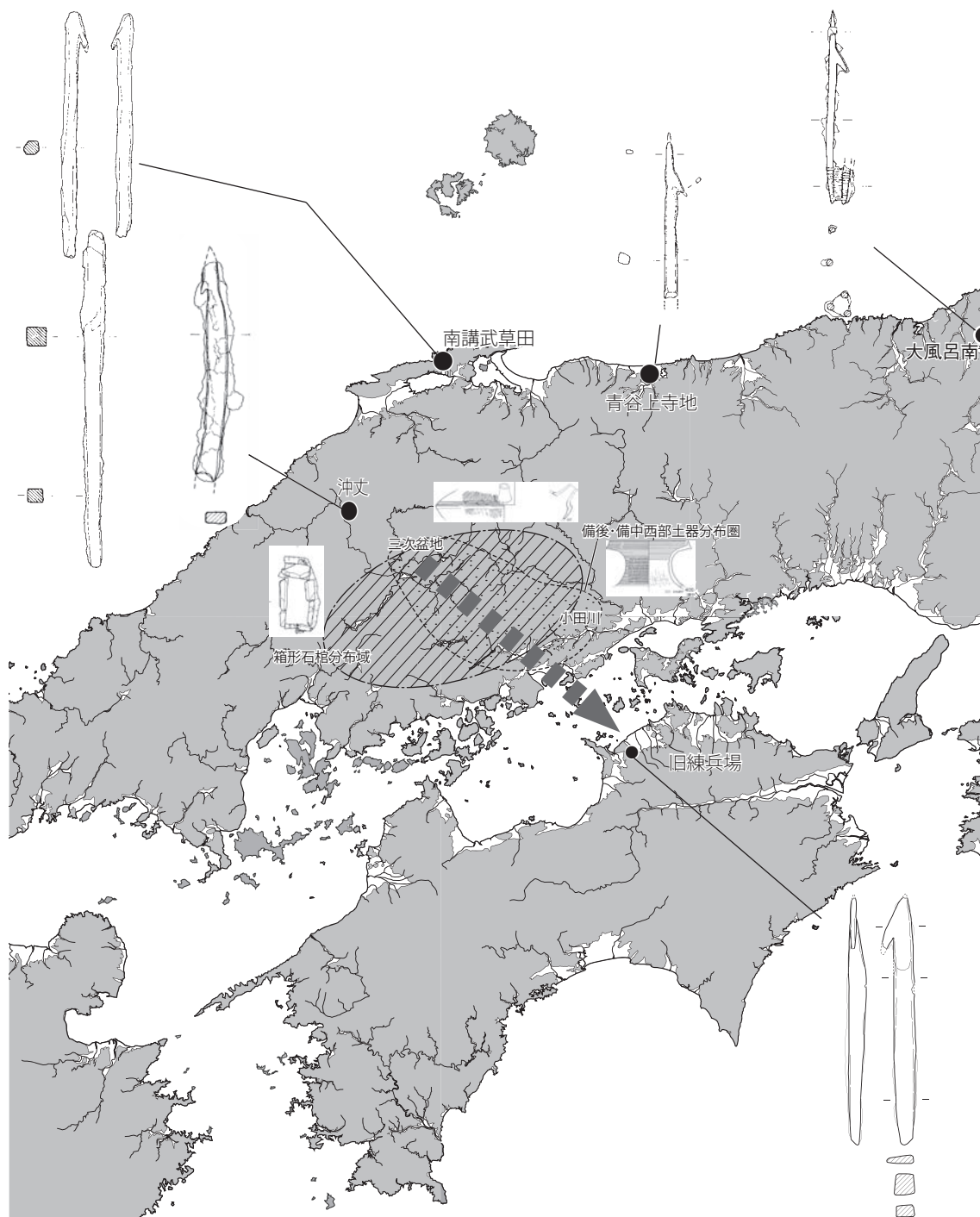


図 973 搬入土器・箱形石棺・刺突漁具からみた交易ルート概念図

高い。また、鉄製刺突漁具を含めた検討から、瀬戸内海や中国山地を介して日本海側へ抜ける交易ルートが存在を想定した。こうした瀬戸内海や中国山地を挟んで展開した一定規模の集団の移動を伴う交易が、経済的な結びつきを示すものなのか、政治的なものであったのかどうかは、現時点では不明とせざるを得ない。特に、備中西部・備後地域に比べて丸亀平野における弥生後期から終末期の墳丘墓については、実態を十分に明らかにできていないため、今後の検討課題としておきたい。

《引用・参考文献》

- 宇垣匡雅 1999「吉備の墓制」『季刊考古学第 67 号 墳墓と弥生社会』雄山閣
池淵俊一 2003「漁撈具」『考古資料大観 第 7 卷 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館
稲垣寿彦 1996「田尻山第 1 号墓について」『芸備第 25 集特集・広島県の弥生時代墳墓』芸備友の会
大久保徹也 1999「四国北東部の墓制－その展開と特質－」『季刊考古学第 67 号 墳墓と弥生社会』雄山閣
大久保徹也 2006「備讃地域における前方後円墳出現時期の様相」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
椿 真治他 1993『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87』岡山県教育委員会
乗松真也 2011「旧練兵場遺跡の漁具」『旧練兵場遺跡Ⅱ（第 19 次調査）』香川県教育委員会ほか
平井 勝 1982『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 47 殿山遺跡 殿山古墳群』岡山県教育委員会
間壁忠彦 1966「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館集報』第 1 号
松本敏三・岩橋 孝 1983『讃岐青銅器集成図録』瀬戸内海歴史民俗資料館
向田裕始 1996「花園遺跡の発掘調査について」『芸備第 25 集特集・広島県の弥生時代墳墓』芸備友の会
矢原高幸 1973『善通寺市の古代文化』

- 香川県教育委員会ほか 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊 稲木遺跡』
香川県教育委員会ほか 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』
香川県教育委員会ほか 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 26 冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会 2012『県道丸亀詫間豊浜線（多度津西工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 西白方・瓦谷遺跡』

《Endnotes》

- 1 総社市教育委員会平井典子氏ご教示による